

4. 1 溶岩流

現在の富士山は、主に1万年前以降の新富士活動時期に中央火口から噴出した溶岩やスコリアにより形成されている。これらの溶岩からなる斜面は、侵食が進んでおり多数の谷筋が形成されている。

約2200年前を境に富士山の活動は、山腹での溶岩、スコリアの噴出に変わり、総量的には大量の溶岩を噴出させたと考えられる。特に、青木ヶ原溶岩は、貞観噴火（864年）により、鳴沢村の氷穴から長尾山にかけてと大室山の南東から北西にかけての2つの割れ目火口列から流出した溶岩により形成されている。この溶岩流出は、当時の「割の海」を埋め立て精進湖と西湖を形成するなど、歴史時代に起きた富士山の噴火記録の中でも最大級の溶岩流出である。本図では、約2200年前を境に新期溶岩流と旧期溶岩流に区分し、さらに細区分した溶岩流名が分かるように表記してある。

山頂火口の噴火により流出した、旧期溶岩流（約2200年前以前に噴出）である大野原（三島）溶岩は黄瀬川沿いを流下し新幹線の三島駅付近（山頂火口から約34km）まで、曾比奈溶岩などは南南東斜面沿いに東名高速道路の富士インターチェンジ（同約22km）まで、猿橋溶岩は桂川沿いを流下し中央本線の猿橋駅（同約36km）まで到達している。かなり大規模な噴火で、大量かつ流動性のある溶岩を流出した火山活動であったことが推定できる。

山頂火口以外の噴火により流出した新期溶岩流（約2200年前以降に噴出）である剣丸尾第一溶岩・檜丸尾第一溶岩は、富士吉田市を挟むように市街地の北東まで流出し、鷹丸尾（檜丸尾第二）溶岩は山中湖西側をとおり忍野村まで到達しているのが分かる。

4. 2 側火山

富士山には、山頂を中心に70以上の側火山が北北西～南南東方向に集中して分布する。側火山には大室山のように比高が300mにもおよぶ大きなものもあるが、その多くは数m～100m程度の比高で“塚”などと呼ばれているスコリア丘である。スコリア丘には、塚のように明瞭な山型の形状を示すもの以外に、溶岩が流出して崩壊しかけているものもある。また、最近の精密地形測量によって直径10m程度のスコリア丘が多数あることや、割れ目火口や火口が連続して分布する火口列などが多く存在することが分ってきた。

特に今回の調査では、富士山北東及び南～南東の山腹斜面で新たに多数のスコリア丘が確認された。津屋（1968）により富士山北東部山腹の“焼山”（図－6参照）と称された周辺では、火口列と割れ目火口などを新たに確認することができた。

南東の山腹には、山頂火口より大きく口をあけた宝永火口が認められる（写真－6参照）。その名の通り江戸時代の宝永4（1707）年に噴火した火口で、第1火口か

ら第3火口まである。火口の地形をよく見ると、最も山頂よりの第1火口の北西斜面に、多数の岩脈が北北西～南南東方向に並んで露出している。火口群の東側に突き出た宝永山の頂部に露出する赤岩は、古富士の山体の一部と考えられている（津屋、1968）。

写真－2の緑丸の地層は、宝永噴火時の降下火砕物である宝永スコリアである。側火山からの最新の噴出物である宝永スコリアが最上部に堆積し、その下部には山頂火口からの最後の噴出物である湯船第2スコリア（写真－2の赤丸）が堆積している様子が分かる。本図では、溶岩流と同じく湯船第2スコリアを基準に新期スコリア丘と旧期スコリア丘に区分することとした。

4. 3 古富士火山斜面

太郎坊北北西1.5km付近、太郎坊西日向山、小富士、富士山北東斜面標高1700～1900m付近に分布している。

本図では津屋（1968）を参考に写真判読を行った。

4. 4 古富士泥流堆積地

古富士泥流堆積地と呼ばれる地層には、岩屑なだれ堆積物や泥流堆積物などが含まれている。古富士泥流の主な堆積地は、富士山西麓の田貫湖周辺、南西麓の羽鮒丘陵や星上丘陵周辺に確認できる。本図では津屋（1968）を参考に写真判読を行った。

4. 5 岩屑なだれと泥流

富士山の東側斜面から山麓の御殿場市にかけて、岩屑なだれ堆積物の分布が確認できる（御殿場岩屑なだれ堆積地）。

新しい宝永スコリアや雪代堆積物によって厚く覆われているが、流れ山などの特徴的な地形が確認できる。

御殿場岩屑なだれ堆積物が、その後の雨水などにより泥流化して二次堆積した御殿場泥流堆積物は、黄瀬川を流れ下り三島市街地周辺に黄瀬川扇状地を形成している。この岩屑なだれは、約2500年前以前に発生したと推定されている。

4. 6 大沢崩れ

大沢崩れは、富士山頂の剣ヶ峯北側の標高3,690mを源頭部とする巨大な崩壊地で（写真－3）、大量の土砂が富士山西麓から南西麓に流れ下り、その下流に広大な大沢扇状地を形成している。

中流部には、岩樋といわれる旧期溶岩を数メートルの幅で樋状に侵食した地形が発達している。山頂直下から標高2,200m付近までの延長は約2.2km、最大幅約550m、最大の深さ約150mで、総崩壊土量7,500万m³と言われるわが国有数の崩壊地である。

近年、大沢崩れでは、非出水期の初冬や晩春に大規模な土石流が発生するという特徴がある。現在、大沢川をはじめ多くの谷では土石流対策や崩壊地対策として